

スクール・カウンセリングと学力問題

センター協力研究員（福島大学大学院教育学研究科教授）生 島 浩

私は、平成13年度から本学大学院に「学校臨床心理専攻」が新設されたことに伴い赴任してきたが、それとともに、福島市内の中学校のスクール・カウンセラーを委嘱された。前職が、非行少年や犯罪者に対する国の社会内処遇を実施する保護観察官という仕事であり、中・高校を中心に学校、特に生徒指導の先生方との連携はあったものの、肝心の「学校臨床」に精通していたわけではない。スクール・カウンセリング経験が、教育現場における生徒とその保護者にかかる心理・社会的援助の実践事始めということになる。

当初、相談室は空き教室が充てられていたが、夏休み期間中に保護者との面接や生徒とグループ・カウンセリングを実施できるように相談室を整備してもらった。また、電話が教頭の前にしかないために、相談室からも保護者と連絡が取れるように携帯電話を要望した。驚いたことに、これまでには、保護者と面談する場所として放送控え室や校長室が主に使われてきたということで、整備された相談室を教師に活用してもらいたいと考えた。

不登校に陥った経緯は、本人なりの同級生との「対人関係」のもつれであることは容易に理解できた。それは、大人から見れば“取るに足らない”ものであるが、彼らからすれば修復不能であるとの思いを強く感じた。彼らの現在の悩みは、相談室登校している姿を同級生に見られないことであり、廊下のガラスにはことごとく紙を貼り、休み時間には息を潜め、自分のクラスがあるフロアーを通らずに別の階まで行って大回りする行動には悲しみさえ覚えた。この相談室は、彼らの貴重な“居場所”になる必要があった。

しかし、不登校状態から一步抜き出た彼らからすれば登校しているには間違いなく、また、保護者や教師も前の状態よりは問題視することがなくなり、悪く言うと放置されている事態に陥っていた。「現況をどう見ているのか、何が今問題なのか」、担任や保護者に問いかけて、今後の対処指針を協働して探ることにまず取り組んだ。

生徒自身も、「同級生とうまくやれない、教室で浮いてしまう」との思いが強いが、確かに、彼らのコミュニケーションの取り方は、独善的で不器用さが目立った。グルー

プ活動の一環としてソーシャル・スキル・トレーニングを試みたが不評で、個別的な働き掛けが、まずは必要であることを痛感した。カウンセリング的対応の中で、生徒の心情面を含めた経験に聴き入り、カウンセラーの胸に一旦含み込むように考えをめぐらし、再び生徒に投げ返すやり取りを続けた。子どもにとって、自分の発した言葉が、相手に理解され、なぞられるように再び戻ってくる体験は新鮮であり、相手の反応を確かめ、脈絡を読んで応答するという対人関係の基本スキルを学ぶ貴重な経験になったであろう。

さらに、自習している彼らに対して、大学院生をサポーター役として学習の手伝いをしてもらったが、そこには、深刻な「学力問題」が存在した。私も英語くらいならと家庭教師役をしてみたが、「私たちがどのくらい頭が悪いのか分かっていない」との訴えに返す言葉がなかった。長年、学ぶことから逃げてきたために、とても自習できる力はないのである。取り急ぎ、教室に入れない生徒が学習する場所として学習室を別に整備してもらい、全ての教師が当番表を作って学習面をみてもらう方策を立ててみたが、自分の生徒が在室していてもほとんど学習室に立ち寄らない教師がいたことも事実であった。

不登校に陥る要因は、前述のようにいじめも含めた「対人関係」であるかもしれないが、そこから立ち直っていくのには「学力問題」が大きいのではないかというのが、私の率直な感想である。中学時代のつまづきのリベンジを高校生活で果たそうと考える生徒も少なくないが、内申書の不良な彼らには、受験の成績しか身を助けるものはないのである。

そのときに、親の職業や学歴で子どもの意欲に大きな格差が生じているとの指摘（苅谷剛彦『階層化日本と教育危機』）や雇用不安が深刻化するなかで、失業者の4人に3人は中卒もしくは高卒であり、中高年の雇用を維持する代償として若年の就業機会が減り、フリーターなどの不安定な雇用が余儀なくされているとの分析（玄田有史『仕事のなかの曖昧な不安』）は、心理臨床家にとっても重く受け止めるべき現実である。